日本保健医療社会学会ニューズレター （No.114） 2019/12/15

目次

１． 第 46 回大会開催挨拶
２． 第 46 回大会演題等申込みのご案内
３． 追悼：名誉会員 相磯冨士雄先生を偲ぶ
４． 理事会報告
５． 定例研究会の報告（関東）
６． 定例研究会の報告（関西）
７． 看護・ケア研究部会報告
８． 「保健医療社会学を学べる研究者」情報の募集
９． 編集後記

１．第 46 回大会開催挨拶（山中大会長）

来る、2020 年 5 月 16 日（土）、17 日（日）の 2 日間にわたり、第 46 回日本保健医療社会学会大会を大阪大学人間科学研究科にて開催する運びとなりました。理事・評議員のみなさま、研究活動委員のみなさまのご支援とご協力に深く感謝いたします。

次回大会のテーマは、未曾有の物質的豊かさの中で、多くの人々が生きづらさを感じる現代社会の現状を踏まえ、「生きるための社会デザインを考える」といたしました。次回大会の開催に際しては、大阪大学人間科学研究科および大阪大学ユネスコチェア『グローバル時代の健康と教育』の共催をいただきました。大阪大学では、2003 年より「デザイン力」をその教育目標の一つとして掲げており、また、大阪大学ユネスコチェアは「健康のための社会デザイン」をキーワードとして掲げております。これらの理念には、個人の教育啓発だけではなく、個人が生きる広い意味での社会環境の改善こそが、現代社会に必要な施策であるという意味がこめられています。

大会プログラムでは、日本におけるホスピタルアート実践の先駆的な施設である「四国こどもとおとなの医療センター」名誉院長中川義信先生をお迎えし、医療環境の今後のあるべき姿について基調講演をいただきます。医療は、単に医療技術を提供する場であるだけでなく、一つの社会環境であるという意味で、すぐれたホスピタルアートは、一つのすぐれた社会デザインであると考えます。また、長年哲学カフェを通じて、がん患者とのコミュニケーションを続けておられる中岡成文先生、西村高宏先生をお迎えし、医療におけるコミュニケーションのあり方についての対談を予定しています。コミュニケーションは、社会をデザインする最も重要な要素であり、よいコミュニケーションは何物にも代えがたい環境です。最後に、医療人類学からコミュニケーションを考える我が大阪大学の池田光穂氏も参戦し、人が生きるための社会デザインはどうあるべきかを全員で議論していきたいと考えます。会員のみなさまには、ラウンドテーブル、ポスターセッション、一般演題へのご参加をいた

だき、学会および大会の理念にお力を添えていただきますようお願い申し上げます。詳細は、大会ホームページをご覧下さい。

なお、大会運営に際しましては、実行委員一同できる限りの努力を惜しみませんが、いたらぬ点など多々生じることもあるかと思います。みなさま方の、ご指導、ご鞭撻、またご寛容のほどを心よりお願い申し上げる次第です。来年度吹田市にて、こころよりお待ち申し上げます。

令和元年１１月吉日
第 46 回日本保健医療社会学会
実行委員を代表して
大会長　山中 浩司

２．第 46 回大会演題等申込みのご案内（研究活動委員会）

第 46 回日本保健医療社会学会大会の演題等の申込が開始となりましたので、申込期間を併せてお知らせいたします。多くの皆様のお申込み、およびご参加をお待ちしております。

一般演題申込期間：　2019 年 12 月 4 日（水）～2020 年 1 月 20 日（月）
RTD 発表申込期間：　2019 年 12 月 4 日（水）～2020 年 1 月 20 日（月）
事前参加受付期間：　2019 年 12 月 4 日（水）～2020 年 4 月 15 日（水）

なお大会 HP の詳細は、下記 URL の通りです。
https://square.umin.ac.jp/medsocio/conf2020/index.html

３．追悼：名誉会員 相磯冨士雄先生を偲ぶ

本学会名誉会員相磯冨士雄先生が今年（2019 年＝令和元年）５月８日にお亡くなりになりました。同先生は 1927 年（昭和２）年 12 月 1 日のお生まれですので、91 歳の天寿を全うされたことになります。先生は東京の立川でお生まれになり、そこで旧制中学まで進まれましたが、戦争が激しくなり、ご先祖の地である熱海に疎開され、旧制沼津中学に転校され、終戦の年（1945 年＝昭和 20 年、終戦は同年 8 月 15 日）の３月に卒業されました。それと同時に陸軍士官学校の予科に入学されました。元来陸軍士官学校は陸軍将校を養成する学校でしたが、当時の状況から特攻隊員養成所でもありました。幸い先生が陸軍予科士官学校在学中に終戦になり、特攻隊員になって命を落とされることは免れました。

終戦直後は教育制度をはじめ、混乱と変革の時代でしたが、先生は旧制成蹊高校に入学、戦時中のご経験から人の命の大切さを感じられてか 1948（昭和 23）年、東北帝国大学の医学部に進まれました。しかし、生活難のため先生は雨の中での海からの荷揚げのアルバイトで無理をされ、肺結核を発病され大学入学の翌年から５年間病気休学され、その間、胸郭成形手術も受けられました。新制度になった東北大学医学部に復学されてから、医学、医療、

衛生を社会的視野から考えようとする「社会衛生部」という学生サークルの立ち上げに参加され、医療の社会化の勉強、東北農村の保健調査、工場労働者の健康相談などに積極的に取組まれました。

大学卒業は 1957（昭和 32）年で、30 歳、医学部生活は病気療養時代を含め 9 年間でした。卒業後はインターン（臨床研修）の後、第三内科に籍を置かれながら、社会的に人々の傷病を予防し、健康を守る公衆衛生に関心をもたれ、宮城県の保健所医師となられ、公衆衛生や衛生行政をめざす医師が入学する日本の公衆衛生の教育や研究のメッカである厚生省直轄の国立公衆衛生院の医学科で 1 年間学ばれました。先生は全国組織である社会医学研究会の活動に熱心に取り組まれました。保健所勤務の医師から今度は国立公衆衛生院の衛生行政学部の衛生教育室長に赴任され、公衆衛生に携わる医師や保健婦などの教育や公衆衛生の研究に当たられました。休日夜間には結核療養所で当日直医として、ご自分も経験した結核の患者さんたちの診療にも熱心に当たられました。

不肖私も国立公衆衛生院と同じく厚生省直轄の病院管理研究所という小さな研究所に奉職していたので相磯先生とお目にかかる機会がありました。因みに私の奉職していた研究所は相磯先生が勤務されていた国立公衆衛生院と合併し現在の国立保健医療科学院に統合されました。

先生は後年国立公衆衛生院から東京学芸大学に出向され、さらに大妻女子大学に移られ、教授として医学知識と社会科学的視点をもった医師として教育や研究に独特な貢献をされました。本学会の前身の研究会が主として社会学研究者により結成されましたが、それを学際的に盛上げて学会にするのに社会科学的視点と素養をもった公衆衛生の医師の参加が必須でしたが相磯先生もそれに貢献されたお一人です。

晩年はご子息夫妻が開業され地域医療に貢献されている温暖な熱海で、お子様達と共に開業されました。それと共に短歌作りにも励まれました。そして、学士会の短歌同好会に入られ、学士会報の「短歌会詠草」に精力的に投稿され、多くの短歌が採用され、掲載されました。2003（平成 15）年から、2017（平成 28）年までの間に、年 6 回刊行の学士会報に約 70 首が掲載されました。いくつかを拾うと

戦時中の思い出と重なる

銃肩に隊列組みて学生の行進せし道を今カップルの群（明治神宮表参道）

奥様と自然と重なる

満開のつつじの花の赤茶けて残るを妻と夕べに摘みたり

医師としての気持ちを詠った

近親に看取られて逝くをのぞむ老友（とも）立ちふさがるは延命医療

相磯先生は、稀に見る温厚な方でしたが、同時に鋭い観察力や意見を披露されることがありました。今でもそれらのいくつかが脳裏を過ります。例えば、概して、進歩的な左翼の人たちが甘い評価をしていた社会主義国の実態について、相磯先生は社会主義の理想に反す

る実態があるのではないかと指摘されていました。社会主義国家は体制の綻びから崩壊しました。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

謝辞：この追悼文の執筆に当たり、相磯冨士雄先生の奥様、ご子息、前田信雄先生、国立保健医療科学院の図書館の方々、および、学士会館の会報係の方々のお世話になりました。記して謝意を表します。

（名誉会員　姉﨑正平）

４．理事会報告（松繁理事）

2019 年の 10 月 26 日（土）に理事会が開催されました。詳細は以下のとおりです。

日時： 2019 年 10 月 26 日（土）　14：00～17：00
会場： (株)国際文献社　アカデミーセンター　4 階会議室
出席者： 朝倉会長、松繁理事、蘭理事、本郷理事、前田理事、天田理事、清水理事、小澤監事、山中大会長（第 46 回）、野島大会事務局長（第 46 回）、事務局平野（記　国際文献社）
欠席者： 中山理事、戸ヶ里理事、武藤理事

1. 2019 年度 前期予算執行状況（松繁理事）
　松繁理事より前期予算執行状況について、基本的に例年通り執行されている旨、報告があった。
2. 編集委員会報告（天田理事）
　天田理事より 10 月 19 日に編集委員会を開催した旨の報告があり、論文の投稿状況について伝えられた。また、編集・査読に関する規定の見直し、論集の電子化について、委員会内で検討されていることが伝えられた。
3. 定例研究会の報告（関東）（前田理事）
　前田理事より 11 月 30 日に立教大学池袋キャンパスにて 1 回目の定例研究会を開催する予定であることが伝えられた。
4. 定例研究会の報告(関西)　（蘭理事・本郷理事）
　本郷理事より 9 月 21 日に龍谷大学梅田キャンパスにて中屋敷均氏を講師として招き、定例研究会を開催したとの報告があった。また、蘭理事より 2 回目の定例研究会は 2～3 月頃に開催予定であることが伝えられた。
5. 看護・ケア研究部会の報告（清水理事）
　清水理事より 11 月 16 日に東京八重洲ホールにて看護・ケア研究部会主催による公開企画を開催する予定であることが伝えられた。
6. 渉外・国際交流活動の報告（武藤理事［松繁理事代読］）

アジア諸国の保健医療社会学研究者らによる国際会議の開催案について検討・審議をした。継続的な開催の可能性や運営体制について、引き続き検討を行っていくことが確認された。

7. 規約の改正について

朝倉会長より他学会の役員規約についての報告があった。現状をふまえながら、本学会においても次回以降の理事会で役員の任期・制限等の規約について検討することとなった。

8. 旅費規程の宿泊費について

朝倉会長より旅費規程の宿泊費について、価格が高騰していることもあり上限額を引き上げることが提案され、承認された。

9. 園田賞選考委員会について

中山理事を選考委員長とすることが承認された。

10. 国際文献社への事務委託契約について（松繁理事）

事務委託契約の内容について確認をし、承認された。

11. 名誉会員推挙について（松繁理事）

松繁理事より、今回は名誉会員推挙の基準に該当する対象者がいない旨、報告があった。

12. ニューズレター113 号及び 114 号の配信について（清水理事）

清水理事よりニューズレターの発行状況について伝えられた。過去のニューズレターの PDF 化作業については国際文献社へ委託することが提案され、承認された。保健医療社会学を学べる大学のリストについては、今後ウェブサイトを準備するとともに会員に情報提供を呼びかけ、着手していくことが伝えられた。

13. 入退会者の承認について（松繁理事）

松繁理事より新入会者 12 名の承認依頼があり、承認された。

14. 第 48 回、第 49 回の大会校（大会長）について（朝倉会長）

第 48 回以降の大会校候補について検討した。

15. その他

天田理事より医学教育のモデルコアカリキュラムの改訂について学会として取り組んだ方が良いとの意見があり、次回理事会で検討することとした。

16. 次回の理事会日程

次回理事会の開催日程を調整した。

17. 第 45 回大会会計報告

朝倉会長より第 45 回大会会計について報告があった。

18. 第 46 回大会について（山中大会長、野島大会事務局長）

山中大会長（第 46 回）より予算案について説明があった。演題募集が次回理事会前の 12 月頃から始まる為、詳細についてメール審議を行うこととなった。

19. 大会用口座開設について

郵便局で単年度利用での口座が開設できなくなったため、学会として大会用口座を開設することが提案され、承認された。

以上

５．定例研究会の報告（関東）（前田理事）

日　時：2019 年 11 月 30 日（土） 14:00～17:00

場　所：立教大学池袋キャンパス 10 号館 X102 教室

講演者：武藤香織先生（東京大学医科学研究所）

テーマ：人の遺伝・ゲノムの社会学～日本の 30 年間を振り返る

概要：人の遺伝・ゲノムの社会学を長く第一人者として牽引されてきた武藤香織先生にご講演をいただいた。ご講演は、この 30 年間を 3 期に分けた上で、その都度ご自身が関わって来られたテーマにそって、論点を提示するものであった。家族性アミロイドポリニューロパチーの患者会の調査から始まり、ハンチントン病患者会の立ち上げと支援、遺伝性乳がん卵巣がん症候群の経験、「がん遺伝子パネル検査」の経験について語られたのち、個人情報保護と遺伝的特徴に基づく差別に関する問題提起がなされた。参加者は非会員も含めて 25 人と多く、科学技術社会論や看護学の立場からの質疑も含め、活発な議論がなされた。議論は、政策が科学技術に与える影響の評価から、遺伝医療がゲノム医療へとシフトしていくなかでの「遺伝」についての理解の変化や、日本における遺伝カウンセリングの位置づけ、患者会調査において留意すべきこと、調査研究と支援をめぐる関係、日本における結婚差別の問題と「どのような行為を日本社会からなくすべきか」という倫理的な問いにいたるまで、多岐にわたった。質疑応答は予定の時間を超過して行われ、閉会したのちも議論や情報交換がなされる盛会となった。

６．定例研究会の報告（関西）（本郷理事）

1）2019 年度第 1 回関西定例研究会

日　時：2019 年 9 月 21 日（土）14:00～16:30

場　所：龍谷大学梅田キャンパス

報告者：中屋敷 均（神戸大学農学研究科）

テーマ：はざまを探る―生命と非生命、そして科学と非科学

要旨

『科学と非科学―その正体を探る』（2019年、講談社）『ウイルスは生きている』（講談社、2016年）、『生命のからくり』（講談社2014年）と分子生物学の知見を精力的に発信している中屋敷均氏をお迎えし、私たち保健医療社会学者とは異なる視点から、科学や科学を支える統計学、さらに科学が把握しきれないリスクとベネフィットについて議論した。中屋敷氏は、科学と神託とを対比して、現代では科学がかつての神託の代わ

りに機能しているとする。しかし実際には、過去の神託がそうであったように、中屋敷氏が専門領域とする農学、あるいは医学でも、科学は依然、不確かな要因に満ちている。科学を不確かにする要因には、①因果関係の複雑さ、②試行の有限性、③認知の限界、が挙げられ、統計学による検証を踏まえても、さまざまな健康被害や薬害が生じている現状は、科学の限界を明確に示しているとも言える。そこから科学者が求められるのは、現代の「神官」になるのではなく、考える素材を提供し、わからないことはわからないことを認める姿勢であることが提示された。報告を受けてフロアからは、科学の定義や前提について、分子生物学や農学の観点から考える健康被害についてといった質問から議論を深めることができた。

参加者は（その後会員申し込みをした）非会員含めて 11 人と少ないながらも（この点は研究活動理事として反省すべきである）、研究会後の懇親会もおこなわれ、第 1 回を盛会裡に終えることができた。

2）2019 年度第 2 回関西定例研究会（予告）

日時： 2020 年 2 月 22 日（土）14:00～16:30（予定）

場所： 神戸研究学園都市大学共同利用施設 UNITY（ユニティ）

https://www.unity-kobe.jp/access

講演者： 藤田 愛（慢性疾患看護専門看護師/ヘルスケア・マネジメント修士・専門職）

医療法人社団慈恵会 北須磨訪問看護・リハビリセンター所長

著書：『「家に帰りたい」「家で最期まで」をかなえる―看護の意味をさがして』（医学書院）

テーマ：人生の最終段階における患者、家族、看護師の会話―そこにどのような意味が存在するのか事例を通して考える

７．看護・ケア研究部会報告（清水理事）

1）公開企画報告

2019 年 11 月 16 日（土）13:30 から、東京八重洲ホール 301 会議室にて、第 3 回例会として公開企画を開きました。参加者は 11 名でした。

秋田大学高齢者医療先端研究センターの板倉有紀さんから、「パーソンセンタードの支援について――災害から始める社会学の試み」と題してお話ししていただきました。板倉さんは、地域包括ケア化が進む現代において、医療的・保健的・福祉的ニーズから零れ落ちるニーズにいかにして気づきうるかという問いを立て、そもそもニーズとはどのように捉えられるのかを議論しながら、フラットな「人として」とはなれない社会的存在である各職種や人びとが、いかにしてアプローチ可能かを考えることが重要だといいます。そこから災害研究に踏み込み、被害とは何か、ヴァルネラビリティはどう捉えられるか、という考察に入っていきますが、その際にジェンダーという視点を取り入れ、それで捉えかえすことの重要性と、それだけで切り取れないものの存在とを注意深く論じていきました。最終的には、ジェ

ンダーだけでなく多様性という観点がいま必要なこと、そこで「昔の」保健師のような存在の再考が必要なこと、そして社会学において災害研究が持つ意味についても触れていました。

フロアからは、災害時の支援のありようについて経験談が語られたり、保健師の現在のありようについて論じられたりしました。また、板倉さんのような社会学的研究がどのような意味でケアや支援の専門家たちにとって有用か、それはジェンダーという概念を持ち込むことそのものというより、その概念の扱い方、現実と照らし合わせる際の丁寧さにあるのではないか、などの議論もありました。災害について、ケアや支援についてというだけでなく、社会学に何ができるかという議論にまで広がる、とても有意義な場となったと思います。（文責：三井さよ）

２）第 4 回例会のご案内

日時：1 月 11 日（土）13：30～

場所：首都大学東京荒川キャンパス校舎棟 364 教室

発表者とテーマ：細野知子さん「糖尿病〈手帳〉をつける経験の現象学的研究」

８．「保健医療社会学を学べる研究者」情報の募集（清水理事）

本学会では会員からの自主的な提供によるデータに基づいた「保健医療社会学が学べる研究者」のリスト作成に取り組むことになりました。頂いた情報は内容ごとに整理をし、学会ホームページ上に掲載します。

個人単位の他、学科・専攻・研究室等でも構いませんし、保健医療社会学を学ぶために有用なサイト等でも構いません。下記の情報を学会事務局までメールでご連絡ください。掲載にあたっての微細な変更については、お任せ頂きたく存じます。

リストの更新は概ね１ヶ月ごとに行い。掲載内容は年度末に向け更新の要望をお尋ねし、更新の希望が示されたもの以外は年度末で削除します。

初めての事業ですので、試行錯誤しながらの運用となると思われますが、どうぞ積極的に情報をご提供ください。

※掲載に必要な情報

・研究者（教員）氏名

・研究室名　〇〇大学大学院　〇〇研究科　〇〇専攻　〇〇研究室等

・所在地

・紹介文：（主たるテーマ、方法論、主たる授業科目等、100 字程度でお願いします。）

・研究室等のサイト URL

・問い合わせ用メールアドレス

９．編集後記（清水理事）

・ 日本保健医療社会学会ニューズレターは第 92 号からは PDF ファイルのメールマガジン

形式で配信しています。また学会ホームページでも公開しています。メールマガジンの文字が読めない場合などの受信に問題がある場合は、恐れ入りますが、日本保健医療社会学会事務局まで御連絡ください。

https://square.umin.ac.jp/medsocio/

発行：日本保健医療社会学会　　編集：広報担当（清水準一）
学会事務局：　東京都新宿区山吹町 358-5　アカデミーセンター
jshms-office@bunken.co.jp　　TEL：03-6824-9375